様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　３ 年　 ５ 月 ３１ 日現在

機関番号：１７１０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2020
課題番号：１８Ｋ００２８１

研究課題名（和文）紫式部日記本文の研究

研究課題名（英文）Text criticism of MURASAKISHIKIBUDiary

研究代表者
沼尻　利通（NUMAJIRI, Toshimichi）

福岡教育大学・教育学部・准教授

研究者番号：９０５８７６３５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,200,000円

研究成果の概要（和文）：『紫式部日記』本文の校本作成のための基礎的作業をおこなった。『紫式部日記』の江戸時代の版本三種類が比較・検討できるための資料を、『紫式部日記本文資料集続』（私家版・2021年）として刊行した。これにより、以前作成した『紫式部日記本文資料集』とあわせて、本文の比較・字母の比較が容易になり、よって、『紫式部日記』諸本の相互の関係や、本文の特徴が、より具体的に明らかにすることができるようになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
『紫式部日記』の江戸時代の版本は三種類あるが、それぞれ未翻刻であった。それを翻刻し、さらに比較が容易なように、三本を並列で示した『紫式部日記本文資料集続』を刊行した。これによって、紫式部日記の本文を容易に比較できるようになり、さらに字母レベルでの異同も一目瞭然にわかるようにした。

研究成果の概要（英文）：We have prepared for making variorum of the main text of the Murasaki-Shikibu Nikki so that one can compare and examine the similarity and differences between three publication types of the text in the Edo period.
As a result, a comparison both in the main text and the origin of Kana characters between the publication types can be conducted easier than previously. It is expected that the mutual relationship between the publication types are revealed more concretely.

研究分野：日本文学

キーワード：日本文学　文献学　平安時代　紫式部日記　字母

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

『紫式部日記』の校本は、池田亀鑑による『校異紫式部日記』(一九六一年公刊)がある。ただし、底本は池田亀鑑の手による校訂本文である。この研究が公表された後、宮内庁書陵部蔵黒川本（以下黒川本)、肥前松平文庫本（以下松平本）が発見された。黒川本は影印が公刊された。そのため気軽に参照できることから、紫式部日記の本文研究は、以後、黒川本を軸としたものとなっていた。多くの注釈書は黒川本を底本とする。とはいえ、黒川本と松平本の比較の研究は、おおまかな本文異同は指摘されており、注釈などにも反映されていたものの、例えばその伝本の系統的位置づけについては、兄弟の関係か親子の関係か、などという指摘されるだけで、その根拠はよくわかっていなかった。本研究では、こうした研究状況をふまえた上で、江戸時代の紫式部日記の版本の翻刻をし、それを比較できる環境を整えた。江戸時代の紫式部日記は、扶桑拾葉集に収載されたもの（以下扶桑本)、群書類従に収載されたもの（以下群書本)、注釈書の紫式部日記傍注（以下傍注本）がある。これら三本の異同を整理した上で、さらに黒川本・松平本を比較し、その本文の関係性を明らかにする必要があった。

本研究の特徴は、本文の関係を、その本文異同からのみではなく、字母の用いられ方を分析することによって、明らかにしようとするところにある。最近の本文研究では、字母や本文の漢字含有率などに目配せをするものが生まれてきた。例えば、斎藤達哉『国語仮名表記史の研究』(武蔵野書院　2021 年)などがあり、その研究は緒に就いていたと言える。本研究でも、本文を比較するにさいして、字母レベルでの異同に着目している。

２．研究の目的

『紫式部日記』の本文研究は、黒川本を底本にすることが多いが、例えば同じ系統とされる松平本との関係について、不分明であり、わからないことが多い。本研究の目的は、多く『紫式部日記』の本文を集成することにより、その本文異同を明らかにし、以て黒川本や松平本の、紫式部日記の伝本における位置づけを明確にするところにある。例えば、黒川本は仮名遣いが統一されておらず、一方で松平本は仮名遣いが統一される傾向にある。こうした事象は、本文異同としては等閑視されてきたが、本研究ではこうしたレベルでの異同にも着目した。また、字母レベルでの異同を注目することにより、諸本の関係を明らかにすることを目的とした。諸本の字母を観察することにより、その本の特性を見ることができるからである。

３．研究の方法

『紫式部日記』の翻刻と、その字母を傍らに示すことにより、異同を明らかにした（右のサンプルを参照)。なお、本研究により作成したものが『紫式部日記本文資料集続』（福岡教育大学国語教育ユニット沼尻研究室、2021 年、315 頁）である。サンプルで示した本文の解説をする。見出しの「秋のけはひ入たつまゝに」は、池田亀鑑『校異紫式部日記』(『紫式部日記』至文堂　一九六一年)を利用した。【扶桑本文】とあるものは、扶桑本の本文翻刻、【扶桑字母】は、その本文の字母である。扶桑本以外、群書本、傍注本など、三本の本文翻刻と字母を示している。こうしたものを作成し、ポイントとなるところの検証をおこなった。
また、上下巻別の字母を採集し、それを表にまとめて、比較を容易にした（下のサンプルを参照)。これによって、諸本の用いられる字母の数を把握できる。

［1］秋のけはひ入たつまゝに（112）

【扶桑本文】秋のけはひのたつまゝに土御門殿の有さまいはんかたなくおかし

【扶桑字母】秋能気者比農堂川末ゝ仁土御門殿能有左満以者无可多那久於可之

【群書本文】秋のけはひの立・まゝに土御門殿の有さまいはんかたなくおかし

【群書字母】秋乃気ハ比能立・末ゝ仁土御門殿能有左満以者无閑多那久於可之

【傍注本文】秋のけはひのたつまゝに土御門殿の有さまいはんかたなくおかし

【傍注字母】秋乃気者比農多川末ゝ仁土御門殿能有左満以者无可多那久於可之

紫式部日記上巻の字母表

仮名	黒川本					
あ	安206	阿57				263
い	以415					415
う	宇365					365
え	衣57	盈10				67
お	於179					179
か	可608	加113	閑20			741

松平本					
安248	阿15				263
以400					400
宇364					364
衣58					58
於216					216
可617	加110	閑9			736

扶桑拾葉集	
安253	阿7
以403	
宇345	
衣64	
於247	
可649	加96

４．研究成果

本研究により、『紫式部日記』の本文は、上巻と下巻、それぞれ別個に考える必要があるという結論に至った。それは、上巻と下巻、それぞれ底本が異なっている場合があるのではないか、との疑問による。こうした疑問が生じた理由を以下、述べていく。

「み」の諸本の字母をみると、上下巻で分けて考えていく必要があるようだ。「み」の字母は、「三」「美」「見」「身」などがある。黒川本は、多い方から「末」「三」「見」「身」という順に用

いられる。松平本も同様（ただし、松平本は「身」が用いられない）。版本は三本とも「三」「美」「見」の順で多く用いられる。下巻を見ると、上巻と同じではない。下巻は、黒川本は「三」「美」「見」「身」、松平本は「美」「三」「見」である。版本は上巻と同じ。こうして見ると、上巻と下巻では用いられる字母の比率に相違があることがわかる。これは、底本としたものの字母が違うのか、あるいは書写者が切り替わったのか、などなど様々な要因が考えられるが、より精確に本文を考えるならば、上巻と下巻は切り離して考えた方が、より研究効率は高いように思われる。

また、黒川本と松平本の字母の用いられ方に相違が見られ、とても同一の底本を用いたとは考えられず、その底本は、それなりに隔たりのあるものだった、とも考えられる。あるいは、黒川本や松平本の書写者の態度は、精確に写すという意識は薄かった可能性もある。

これを端的にあらわすものは、「わ」の字母である。「わ」の字母は「和」と「王」があるが、黒川本の上巻では「王」が 59 例、「和」が 46 例。松平本の上巻では「和」が 50 例、「王」が 49 例。下巻では、黒川本は「王」が 64 例、「和」が 46 例。松平本は「和」が 59 例、「王」が 45 例。上下巻ともに黒川本は「王」を多く用い、松平本は「和」を多く用いる。この違いは、黒川本と松平本に懸隔があることを意味している。従来の研究では、黒川本と松平本は近似しているとされているが、字母レベルで見ると、相違のある本と言わざるをえない。ちなみに、扶桑本、群書本、傍注本、ともに黒川本に近く、「王」を多く用いる本である。ただし、群書本は下巻だけは、松平本の傾向に近い。これは、群書本は、下巻だけは別人が書写した、もしくは底本が別系統のものだった、との可能性もある。こういうところからも、上巻と下巻はある程度切り離して考える必要性がある。

黒川本と松平本の用いられる字母の違いは、「せ」でも明らかである。「せ」の字母は「世」「勢」「声」がある。黒川本は上下巻ともに「世」を最も多く用いるが、松平本は上下巻ともに「声」が多い。それぞれの書写者の好みの問題か、あるいは底本の問題か、これだけでは判然とはしないものの、黒川本と松平本は、安易にその親和性を問題とすべきではなく、むしろその懸隔こそを注目しなければならない。

また「け」の字母の用いられ方も、示唆的であった。「け」の字母は「計」「気」「希」「个」「遣」が用いられる。上巻では、黒川本は「気」「希」「計」「个」「遣」が順で多く用いられている。ところが、下巻では「計」「気」「遣」「希」「个」であり、相違する。松平本の上巻は「計」「気」「个」「希」「遣」の順で多いが、下巻は「計」「个」「気」「遣」「希」である。最も多く用いられるものは「計」で共通するが、他は微妙に異なる。版本も、上巻では「計」が最も多く用いられるが、下巻では「遣」が最も多く用いられる字母となっている。

また、本研究により、明らかになったことは、いわゆる版本の本文の脱文箇所、補入箇所が明らかになったことである。これまで、扶桑本には脱文があり、それを傍注本が古本によって穴埋めをしていることが明らかとなっており、その穴埋めをした本文とは、黒川本や松平本ではないかと考えられていた。例えば、黒川本では「弁の内侍のもにしろかねのすはまつるをたてたるしさまめつらしものぬい物」とのところ、下線部部分は扶桑本では欠けているのであった。

このところ、傍注本や群書本では、何らかの本を以て埋められている。下線部分の黒川本の字母は「春者万徒類遠多天堂留志佐万女川良之裳能」、松平本は「春ハ末徒留遠多天堂留志左満女川良之毛能」。傍注本は「春者満鶴遠多天多留志左満女川良之」、群書本は「寸ハ万鶴遠太天多類志左満女川良之」。こう見ると、群書本は傍注本に近いことが明らかである。傍注本は黒川本と松平本、どちらに近いかというと、傍注本は「多留志左満」のところ、黒川本「堂留志佐万」、松平本「堂留志左満」であるが「左」「満」の共通性から、どちらかというと松平本に近いようである。

また、黒川本「七日夜はおほやけの御うふやしない」の本文は、松平本は有し、扶桑本に欠く。ここは傍注本・群書本は存する。字母での異同で比較していくと、黒川本は「七日夜ハ於保也気能御宇婦也之奈以」、松平本は「七日夜ハ於本也計乃御宇不屋之奈比」、傍注本「七日夜ハ於本也計乃御宇不屋之奈比」、群書本「七日能与ハ於本也遣乃御宇婦也之奈比」。この下線部を比較すると、黒川本は孤立し、傍注本は松平本に近いことが明らか。このことから、傍注本が参照したとすれば、黒川本ではなく、松平本ということになる。

こうした手法で、欠けた箇所の傍注本の本文を見ていくと、松平本により近いものが多く、傍注本は松平本の系統の古本を見ていたことが推測できる。

本研究の調査により、これまで異同としては認定されていなかった、仮名遣いなどの異同に着目すると、黒川本は仮名遣いの統一がなされていない本であることがわかった。それに対して、松平本は仮名遣いの統一がなされていることがわかった。このことから、松平本は、おそらくそれなりに学識のある人間の手により、校訂された可能性もあり、それなりに流通していた可能性もある。

本文の比較は、その翻字の違いのみを考えるのではなく、字母レベルでの視座も取り入れることによって、より精密に分析が可能になることが明らかとなった。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計　5 件（うち査読付論文　2 件／うち国際共著　0 件／うちオープンアクセス 4 件）なお、共著には、論者名に下線を付した。

【1】沼尻利通、「東松本『大鏡』裏書所引枕草子本文の検討」「福岡教育大学国語科研究論

集」第 60 号、2019 年 2 月、P1〜10
【2】中尾友香梨・白石良夫・大久保順子・土屋育子・沼尻利通・日高愛子、「小城鍋島文庫蔵書解題稿(三)」「佐賀大学全学教育機構紀要」第 7 号、2019 年 2 月、P67~69
【3】中尾友香梨・白石良夫・三ツ松誠・日高愛子・大久保順子・沼尻利通・中尾健一郎・村上義明・二宮愛理・進藤康子・亀井森・土屋育子・田中圭子・中山成一・脇山真衣、「小城鍋島文庫蔵『和学知辺草』翻刻稿(上)」「佐賀大学地域学歴史文化研究センター研究紀要」第 14 号、2019 年 9 月、P95~115
【4】沼尻利通、「佐賀大学附属図書館小城鍋島文庫蔵『うつほ物語』延宝五年版本の巻序」「福岡教育大学国語科研究論集」第 61 号、2020 年 2 月、P1〜13
【5】沼尻利通、「加藤磐斎と島津久基の紫清観」「むらさき」(紫式部学会)、第 57 輯、2020 年 12 月、P74~78

〔学会発表〕(計　0 件)

〔図書〕(計　2 件)
【1】沼尻利通、『紫式部日記本文資料集続』福岡教育大学国語教育ユニット沼尻研究室、2021 年 1 月、315 頁。
【2】沼尻利通、『漢文法の基礎』福岡教育大学国語教育ユニット沼尻研究室、2021 年 2 月、34 頁。

〔産業財産権〕

○出願状況(計　0 件)

○取得状況(計　0 件)

〔その他〕
ホームページ等
なし

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計3件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 沼尻利通	４．巻 61
２．論文標題 沼尻利通-佐賀大学附属図書館小城鍋島文庫蔵『うつほ物語』延宝五年版本の巻序	５．発行年 2020年
３．雑誌名 福岡教育大学国語科研究論集	６．最初と最後の頁 1-13
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 中尾友香梨・白石良夫・大久保順子・土屋育子・沼尻利通・日高愛子	４．巻 7
２．論文標題 小城鍋島文庫蔵書解題稿(三)	５．発行年 2019年
３．雑誌名 佐賀大学全学教育機構紀要	６．最初と最後の頁 77-83
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 沼尻利通	４．巻 60
２．論文標題 東松本『大鏡』裏書所引枕草子本文の検討	５．発行年 2019年
３．雑誌名 福岡教育大学国語科研究論集	６．最初と最後の頁 1-10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計0件

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関